「元初まりの話」に登場する動物たち（９）

「うを」と「み」と「どぢよ」について

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

天理教における「元初まりの話」は、根源的で普遍的なものである。それゆえ、その神意を理解することは決して容易ではない。そうであるからこそ、教祖は“見立て”という理解しやすいたとえ話を通して、私たちにさまざまな守護を教示されているのである。

『天理教教典』の第三章「元の理」に、以下の記述がある。

> この世の元初りは、どろ海であつた。月日親神は、この混沌たる様を味気なく思召し、人間を造り、その陽気ぐらしをするのを見て、ともに楽しもうと思いつかれた。
>
> そこで、どろ海中を見澄まされると、沢山のどぢよの中に、うをとみとが混つている。夫婦の雛型にしようと、先ずこれを引き寄せ、その一すじ心なるを見澄ました上、最初に産みおろす子数の年限が経ったなら、宿し込みのいんねんある元のやしきに連れ帰り、神として拝をさせようと約束し、承知をさせて貰い受けられた。

教祖は、元の「いんねん」と「よふきづとめ」の理を私たち人間に了解させようとして、このような「元初まりの話」を初めて明かされたのである。そして、私たち人間が誕生した経緯とその理由がこの中に示されていること、「陽気ぐらし」世界への実現に向けた「いんねん」の自覚と「つとめ」の理をしっかり心におさめることを、私たちに強く促されたのである。

そこで、本稿では、上段で引用した『教典』第三章に登場する「うを」、「み」、「どぢよ」の相互の関連性・共通性を、改めて動物生態学的視点から整理し、考察することとする。

「うを」の生態

本連載の第３回で紹介したように、「うを」は小型の「鯢魚」、いわゆる“畑ドジョウ”を指し、『大和本草』には大きさが「五六寸」（全長およそ 15 ～ 18cm）と記されている。これは、有尾両生類の一種・カスミサンショウウオのことだと結論づけた。ちなみに筆者が奈良市内の個体を計測したところ、全長は 15 cm 前後であった。さらに、第５回では、「鯢魚」の泳ぎ方を、山田伊八郎の『聞問記』の「古記」から、「此のうをハ、　よこいもよらす　あといも　もどらすに、ただむこい〳〵と　いくと斗り」という表現を引用し、「鯢魚」が「一すじ心」を示すかのように、前へ前へと進む泳ぎ方が特徴だ、と述べた。

第４回では、「鯢魚」であるカスミサンショウウオの生息地は、青垣の山々から大和の平野部へ流れ下る布留川などによってできた扇状地の緩斜面山麓で、森や林の縁にあたる自然豊かな「林縁部」だと紹介した。そして、そのような林縁部周辺で越冬していた個体のほとんどは、早春（２～４月）に水たまりへ集まって繁殖をおこない、卵は水中の枝葉や石の水面直下に産み付けられる。産卵数は約 60 ～ 100 個ほどで、個体によって数のばらつきは大きい。水中で孵化した幼生はその後変態し、幼体となって陸上生活をはじめ、３～４年には成体となって繁殖に参加するようになる。

「み」の生態

一方、「み」は、第７回で紹介したように、『山海経』の「西山経」に「白蛇」という漢字が登場し、この漢字に「みずへび」のルビがふられている。そして『和漢三才図会』に「水蛇」は「鱧（今日でいう魚類の“ハモ”ではない）」によく化けると記されている。この「鱧」は、『本草綱目』ではヤツメウナギのことだとの解説があり、ヤツメウナギは、『和漢三才図会』にあるように、奈良県内に分布するのは「五、六寸以上のものはいない」と記されている。この大きさはヤツメウナギの中でも小型のスナヤツメを指し、全長は 15 ～ 20cm 前後で、筆者が実際に見たことがあるのは全長６～13cm のアンモシーテス幼生だった。ふだん私たちが実際に小川で見ることができるのは、成体ではなくアンモシーテス幼生の場合の方が多い。

このスナヤツメが生息する場所は、流れの緩やかな比較的澄んだ小川で、とくにアンモシーテス幼生は、ふだんは泥の中に潜って珪藻類や有機物を食べて生活している。４年目の秋になると幼生は変態して成体となる。しかし、変態後は消化管が退化しているために採餌はできず、翌春に産卵して一生を終える。繁殖期は４～６月で、サケの産卵のように、川の砂礫底に産卵床（くぼみ）をつくり、そこに雌は卵を産む。そのさい、雌が産んだ卵に５～ 10 匹の雄が覆い重なるように群がり、一斉に放精する。

「どぢよ」の生態

本連載の第４回で触れたように、「どぢよ」は「泥鰌」、すなわちコイ目、ドジョウ科、ドジョウ属のドジョウを主に指している。しかし、ドジョウの仲間でスジシマドジョウ、シマドジョウ、アジメドジョウ、ホトケドジョウ、ナガレホトケドジョウも同じように「ドジョウ」と呼んでいた可能性がある。

このドジョウの繁殖時期は４～７月と９～ 10 月の２回ある。田んぼのあちこちの泥土の中で越冬していた個体が４月になると泥土の中から姿を現し、田畑のまわりの水路や細流域、あるいは水たまりへと向かう。向かった先は、水田や湿地、周辺の水たまりの泥底など、静水性や止水性の水域である。ドジョウはこのような場所で繁殖する。産卵は、雄が雌の腹部に巻き付くことによっておこなわれる。卵は水草やイネの株などに産み付けられるが、多くは泥底に落ちる。卵は数日で孵化し、孵化した個体は２年目に成体となる。成体の全長は 14 ～ 18 cm で、雌の方が雄よりも大きい。

「うを」と「み」と「どぢよ」の関連性・共通性

カスミサンショウウオ、スナヤツメ、ドジョウは布留川支流の三島川など、緩やかに流れる小川や湿地の細流、水たまりを共通の生息地としている。その場所は川底の落葉や泥中であったりする。そして、新緑が芽吹く４月になると、この３種は同じ水域で出会うことになる。まさに、「沢山のどぢよの中に、うをとみとが混つている」状態となる。３種それぞれの全長は 15 cm 前後とほぼ同じ大きさで、卵から孵化した幼生は、５月頃になると３種とも全長 1.5 ～ 2.0cm 前後の幼生･幼魚となる。

なかでも、カスミサンショウウオ、スナヤツメの２種は、『天理教教典』に示されているように、「宿し込みのいんねんある元のやしきに連れ帰り、神として拝をさせようと約束し、承知をさせて貰い受けられた」とある。これら２種は親神によって重要な役割を課せられ約束された、天理教における根源的で普遍的な夫婦・雛型の「理」をもつ生き物といえる。